◎インタビュー

石の地を締めて生み出す究極の艶 千年後を見据える研磨墓石「和乃塔」

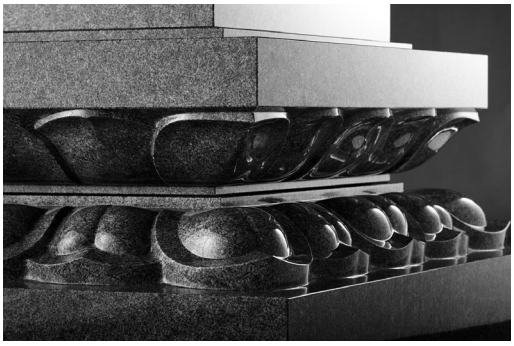
企画・制作 ㈲翼石材（高松市庵治町）

本誌九月号既報のとおり、㈲翼石材（青木秀敏社長）が企画・販売する「和乃塔」シリーズが注目だ。究極の磨きを追い求め、細かな工程管理と微調整により〝潤む艶〟を実現。その美しさがお施主様に大きな感動を与えている。試作期間は約十年。制作の陣頭指揮を執り、その生みの親ともいえる同社企画室の高橋晋也氏に話を聞いた。

――「和乃塔」はいつから構想しましたか？

高橋　当社の創業は二〇〇二年ですが、創業当初から構想していました。お施主様の安心のために、五百年後、千年後を見据えて究極の美しさと艶持ちを追求しています。

実際に産地内の協力工場で試作を開始したのは二〇〇七年頃からです。毎日ではなく、週二～三日、夕方から三時間ほど。最初は自動研磨機を使っていましたが、自動機では石の状態を見極めながらの微調整が不可能なので、数ヵ月で手動研磨機に切り替えました。



「和乃塔」反花座制作例。香箱や亀腹（左頁に写真掲載）など役モノの研磨は手磨きで、じっくりと時間をかけて行ない、「職人さんの手がはれました」と高橋さん。結果、写真のとおりあやしいまでの艶を生む

手動機でも職人さんの経験や勘に頼らず、当日の天候も含めて細かく工程を管理し、試行錯誤を繰り返した結果、約二十工程による工法に至りました。同じ粒度の研磨盤でもサイズや硬さの違うものを組み合わせています。それも、ただやみくもに研磨するのではなく、砥汁の状況を見極め、すべての研磨盤にきちんと自分の仕事をさせて仕上げています。時間をかけて磨けばいい、というものではありません。

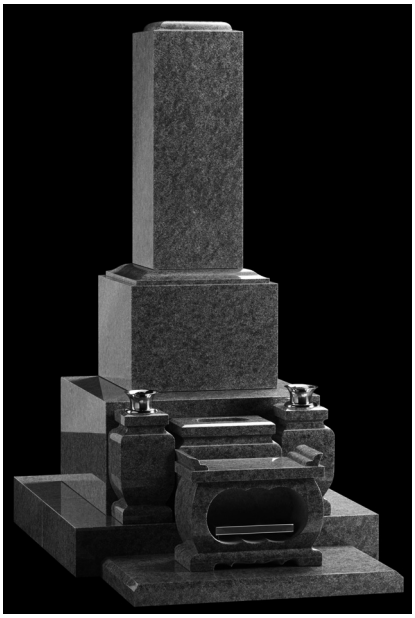
――気になるのは、やはり艶持ちの程度ですね。

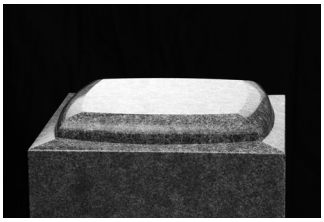
高橋　これは実際にわからないことですが、私には持論があり、表面の艶は年月の経過とともに褪めていくのは仕方なく、肝心なのはその下の艶だと考えています。

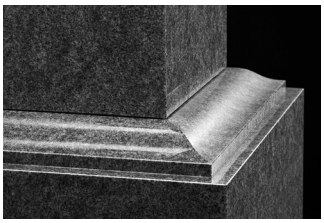
「和乃塔」の艶（最終仕上げ、#8000相当）は、庵治石細目で96～98、ときには100の光沢値を出しますが、実はツヤ下工程（#3000相当）でも89～92を出しています。結果としてこの時点で表層部の黒雲母の剥がれや、前工程までの研磨キズもほとんど取り除き、しっかりと石の地が締まったことになります。これに対して、たとえば通常の研磨工程でツヤ下が82前後、最終仕上げ97前後で仕上がった場合、たしかに光沢計での数字は上がっていますが、表層部の黒雲母の剥がれや、前工程までの研磨キズを取りきれていない状態のまま最終仕

上げがなされていると思われます。この状況だと、たとえ仕上がりが良くても劣化は速まっていくものと予想されます。

当社では叩き仕上げ等の手仕事による「世伝石塔」シリーズもつくっていますが、叩きにも研磨にも共通する最も大事なことは「石の地を締める」ということです。丁寧に地を締めていくと、石は硬度を増していきます。「和乃塔」では、すべての研磨盤にしっかりと仕事をさせて地を締めていき、その積み重ねにより石自体が水分を含んでいるような〝潤む艶〟を生み出すのです。実際にご覧になれば、その美しさは一目瞭然です。

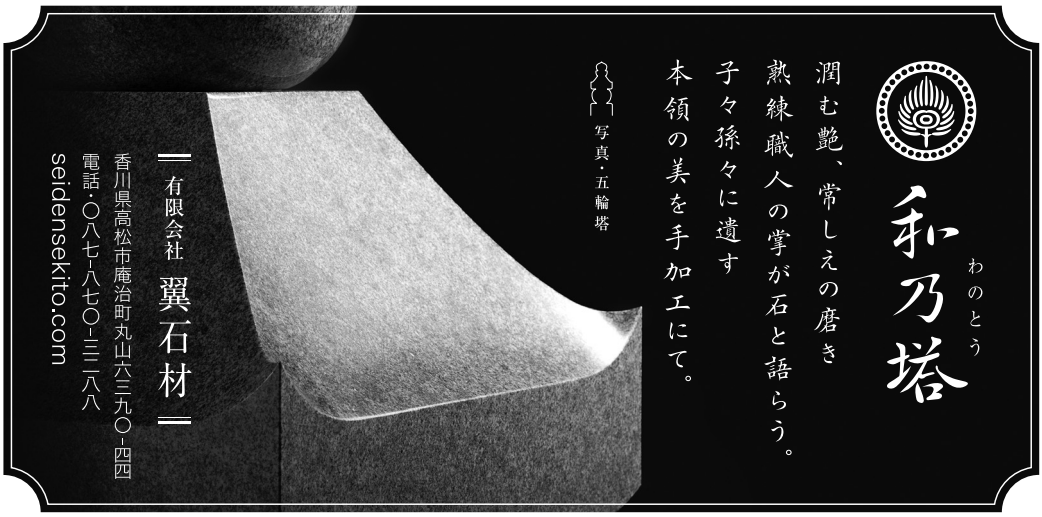






「和乃塔」角柱塔。丁寧に研磨するので平面精度は驚くほど高い。右上は香箱、右下は亀腹の研磨の状況

――高級志向のお施主様がターゲットですね。

高橋　すでに庵治石細目の五輪塔を建立するなど、実績も増えています。あるお施主様は当初の予算をオーバーしたものの、それでも完成品を見るなり、「艶が全然違う！」と感動され、金額については「まったく惜しくない」といっていただいたそうです。

小売店様の販促に活用できるよう、当社では専用のウェブサイトを立ち上げ、「世伝石塔」「和乃塔」シリーズを掲載しています。またサイト以外にもお施主様への商品説明や細かな打ち合わせ等、当社が全面的にフォローいたします。ぜひお気軽にお問い合わせください。